LIBRARY ☆

№3　平成 25 年 7 月 17 日
津田沼高等学校図書委員会

「１人の子どもが、１人の教師が、１冊の本、そして１本のペンが、世界を変えます。教育が唯一の解決策なのです。まず“教育”を！」

（マララ・ユスフザイさん（16 歳）国連演説より）

新着図書案内

新着図書の一部ですが、御紹介します。

「頭の打ち所が悪かった熊の話」　　安東みきえ　著　　理論社

熊はなぜ、頭を打ったの？そして、探し求めているレディベアとは？人生について考える７つの動物寓話。「いただきます」では、何かを食べずにはいられない動物の性と悲しみについて、書かれています。

「ヘビの恩返し」では、カコの実を食べてしまった、父親ヘビとミライの実を食べてしまった母親ヘビがユーモラスに描かれています。人生を考える「深いい話」満載です。簡単に読めるので是非読んでみてください。

「百万ドルをとり返せ！」　　ジェフリー・アーチャー　作　　新潮文庫

うその投資話に引っかかった男たちは、投資した計百万ドルをとり返すため、様々な計略を練って、お金を取り戻しにかかります。そこに現れる謎の美女!?

やたら、人が殺される日本のベストセラーに比べ、誰一人殺されることのない知的ゲーム。ジェフリー・アーチャーの作品はその落ちが凄い!!　短編集のどんでん返しも秀逸です。(残念ながら短編集はまだ図書館にありません。)

以上は読みやすく楽しい本です。　以下はノン・フイクションになります。

「夜と霧」　ヴィクトール・Ｅ・フランクル　著　　池田佳代子　訳　　みすず書房

若き精神科医はユダヤ人であるということで、突然妻とともにナチにとらわれ、妻とは別々にアウシュビッツに収容されます。フランクルは、妻の身を案じながら、収容所を転々とします。移動のたびに医者として、常に条件が良い方を他の人に譲って行くのですが･･･。

生の極限状態にあって、なお、精神科医として冷静に状況を観察して、描かれている作品には、人間の偉大さと悲惨さがあますところなく書かれています。そして、運命の不可解さも。人生で１度は読んでおきたい、そんな本です。

「ルポ　貧困大国アメリカ」　　堤未果　著　　岩波書店

経済大国アメリカ!! そこには日本のような医療制度はありません。医療費は自腹。医療保険に入っていなければ･･･。入っていても、医療費が高額だと一挙に貧困に陥る国。そして、貧困に陥った人が食するものは･･･。貧困層に肥満が多いのです。

「ルポ　貧困大国アメリカⅡ」　　堤未果　著　　岩波書店

Ｏ・ヘンリー短編集では、金に困った男がわざと刑務所に入ろうとする話があります。ところが、今のアメリカは州によっては、州経営の刑務所に入ると、囚人一人当たり 1 日 10 ドル（訳 1,000 円）払わなければなりません。病気になったら治療費まで請求され、模範囚で出所しても、刑務所での経費が借金として重くのしかかる。そのため、囚人たちは、刑務所での様々な出費を賄うために刑務所内で働きます。仕事によって時給が違うので、割りの良い仕事には皆が飛びつきます。今や、刑務所は超低賃金の労働力を提供する場となっている。そんな話がⅡには書かれています。日本とは違った社会制度の国アメリカの現状は実に興味深くもあり、空恐ろしくもあり…。しかし、どんどんアメリカ型の社会になっている日本。これは日本の近未来の姿かもしれません。是非一読を。

本棚からひとつかみ（図書館の書棚から）

「ソロモンの指環　動物行動学入門」　　コンラット・ローレンツ著　　早川書房

ソロモンとは古代けものや鳥と会話できたという伝説の王の名前です。著者ローレンツは何とカラスと会話ができると言う。読んでいると自分も動物について研究してみたいと思わずひきこまれるロング・セラーです。

「おやすみラフマニノフ」　　中山七里　著　　宝島社

事件はストラディバリのチェロの盗難事件から始まった。次から次に起こる事件、犯人は？そして犯行の動機は？推理小説仕立てですが、音楽大学を舞台に描かれているこの小説。音大を目指す生徒には是非読んでもらいたい作品です。

音楽大学を出て未来はあるのか。2010 年リーマンショックの影響で、すっかり冷え込んだ就職市場。音楽のエキスパートを目指した青年たちの未来は*!?*音楽家たちの苦悩と喜び、そして、ハーモニーを作り上げる難しさをも知ることができる作品です。最後のどんでん返しが･･･。思わず、ラフマニノフの曲を聞きたくなる、そんな本です。

同じ作者の「さよならドビュッシー」を読んでから読むとさらに楽しめます。

「悪魔のパス　天使のゴール」　　村上龍　著　　幻冬社

村上春樹と並び称せられる作家*!!*　麻薬とセックスに溺れる自堕落な若者たちを描いた「限りなく透明に近いブルー」で芥川龍之介賞を受賞。その後、「コインロッカー・ベービーズ」（当時連続してコインロッカーに赤ん坊が捨てられた事件を題材に、その赤ちゃんが助けられ成長して･･･。結構ショッキングな小説でした。）（講談社）や「最後の家族」（家庭が崩壊していく様子が描かれた小説です。）（幻冬舎）など、世相を反映した作品を描いています。

この作品は、究極のドーピングが話の中心にはなっていますが、作者の意図としては純粋にサッカーを描こうと考え、書かれた小説です。サッカーを知らなくても十分楽しめる小説ですが、サッカーに詳しい人が読んだらもっと楽しいのではないかと思います。

新潮文庫・角川文庫・講談社文庫などが夏休み推奨の本 100 冊を冊子にまとめ、それらの本が書店に置いてあります。図書館の本だけではなく、是非、本屋さんで手に取って選んでください。また、新聞のコラム欄に目を通したり、書写したりすると、読解力アップ・文章力アップにつながります。　　文責　図書部　町田